
疾風の風

隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疾風の風

【Zコード】

N7853Y

【作者名】

隼人

【あらすじ】

いつも通り、朝散歩をする。

すると、ある廃れたガレージに着く。

その中には、埃を被ったバイクの姿。

主人公隼人と、そのバイクCBR1000RRとの旅物語。

episode1 ~CBR1-000RRとの出会い~ (前書き)

どうも!ほかの小説書いてるのと直違つ話書いている馬鹿です。

今回、バイクをメインとした話です。オタク要素が入ってあります
が、

さほど濃くはあつませんので、「安心ください」。

バイクが可愛そだ!と思つた方は、すぐに「退場お願ひ致しま
す。

それは、ある冬休みのころだった。

いつも通り、朝の散歩。周りには雪。

「(・・・寒いな)」

ただ、暇だからいつも歩く。まあ、独りで寂しいのもあるが。

「(今日は、違う道を行つてみるか)」
道を変える。もちろん、気まぐれで行く。

家族から離れていくらぐらいだろうか。大学へ行くために、一人暮らしをしていて、帰つてみたら

家族は引っ越していた。

「(ほんと、テーブルに引っ越しますといふことだけしか書いてくれてなかつたし

どこに居るのかも分からん)」

そして、今はその家で暮らしている。

昔話を思い出しながら歩いてきた。すると、目の前にはすでに廃れたガレージ。

「(・・・?)」

気になつたから、空けてみた。中には、
埃の被つた、バイクだった。

? ? ? 「おや、誰かいるのですかな?」

「あ・・・、ご老体、このガレージは何かわかりますか?」

老人「いかにも、私のですよ。もうすぐ、この血を離れる予定なので、見にきたのです」
ああ、老人だったのか。謝るひと思つて、

老人「そのバイクは・・・、差し上げましょうか。元々、孫にあげる予定だつたのですが・・・」

「お孫さんがどうかしましたか？」

老人「その子は、バイクが大好きで。バイクの免許が取れたと思うと、事故で・・・死んでしまいました」

「あ・・・、それは失礼なことをお聞きしました。ですが、このバイク」

老人「いいんですよ。あなたは孫にしてある」

「は、はあ。」

老体「ほら、これがキーじゃ」

「あ、有難う御座います」

キーを渡されると、老人は去ってしまった。

「（バイク・・・か。免許は一応取つてあるけど）」

昔、暇だつたときに取つてしまつた。

「ん？」

バイクには、CBR1000RRとロゴがあつた。

「ホンダ・・・か。ようしな、1000RR。俺は、隼人はやとだ。」

コイツで、何処か行こう。そして、色々なものを見よう。そう思つた。

「動くのかな？」のままじゃ帰りたくても帰れん」とりあえず、キーを挿し、まわしてみる。

ズドルン

といつた音と共に、エンジン音が響く。

「おお、カツコいい音だ。そんで、ヘルメットは

？？？」「あれ、君は誰かな？」

「？」

？？？「バイク、どうしたんだい？」

ライディングスーツを着ている紳士っぽい人にあつた。

「ああ、いえ。これはもらつて、今から持ち帰らうかなと思いまして。ですが、ヘルメットがないんで」

疾風「ああ、それじゃあげようじゃないか。あ、ちなみに僕は疾風。はやてよろしく」

「あ、疾風さんですね。僕は隼人です」

疾風「へえ、一文字しか変わらないとはね」

「なんの偶然でしょうか」

ハハハ、と一人で笑う。

疾風「ほら、コレでいいかな」

疾風がバイクから格好良いヘルメットを取り出した。

「え、こんな格好いいのいいんですか？」

疾風「僕じゃ、こんなの派手すぎて無理だよ」

「じゃあ貰えるものは貰つときましょ」

疾風「貰つても嬉しくないものは？」

「そりや貰わないですよ」

疾風「だよなー」

また一人で笑う。

疾風「あ、連絡先交換しておこうぜ。ケータイ持つてるかい？」

「あ、はい。」

ケータイを取り出す。一応スマートフォンで、画面には・・・

疾風「お、東 p r o j e c t の射 丸 文じやないか」

「お、正解。知つているつてことは好きなキャラクターでも居るんですか？」

疾風「ん~。そうだな、つるぺったんかな」

つるぺったんか。理解もできる。

疾風「とりあえず、メアド交換しようぜ」

「はー」

・・・

疾風「それじゃあな。今度一緒に走りやがれ」
「はー！ それまでに色々会わせておきまわ」

疾風「それじゃ」

シューインという音が似合ひの音で、疾風が走つていった。

「（さて、1000RR。俺等も行くか）」

それに答えたかのように、ブルンブルンとエンジンが唸る。

「さて、出発だ」

まずは家。アクセルを捻る。

「おお、結構早い」

ウインウィンと、ギアを下げる。

信号が青になる。

ゆっくりと走る。まだ冬だ、風が冷たいけど、気持ちが良い。

・・・

「さて、到着だ。ちょっと待つてくれよ、1000RR」

静かにエンジンを止める。

「（確かにこちら辺に……）あつたあつた

出てきたのは、小さめのステッカー。射名 文のステッカーだ。
あと、電話帳を探る。

「（確かに、コイツんちはバイク屋だつたはず）」「
ピ、ポ、パ、ポ。ふるるる、ふるるる。

袁「はい、バイクのことならお任せ、袁です」
袁。昔だが、よく一緒に悪戯したもんだ。

「よお、久しぶり。隼人だ」

袁「おお、隼人！で、今回はなんだ？又悪戯か？」

「何時の話だよ・・・。今回は、バイクを見てほしいんだ」

袁「なんだ、バイクか。明日持つて来い」

「住所は？」

袁「ああ、・・・」

「さんきゅーな」

袁「お、久しぶりに礼を聞いたぜ」

「そうか？ いつもこんな感じだと思うが」

袁「いや、お前は結構生き生きしてるぜ。じゃ、またな」

「ああ、有難うな。」

ガチャ。電話が切れる。

「さて、ステッカー貼るかな」

コートを背負う。ステッカーとハサミを持って外にでる。

・・・

「こんなもんか。なんか、ごめんなさい、老人」

本当にごめんなさい。

「じゃ、通販でいるもん頼んで今日は寝るか・・・。よし、バイクをどうしようかな」

エンジンをかける。やはりエンジン音が気持ち良い。

「庭に入れとか。チャリ用の鍵じやあ心配だけど、仕方ない」庭に入れる。バリアフリーだつたため、出し入れが簡単だ。

「親からの金、まったく使ってないしな。今使うべきかな」

テーブルの上にあった手紙と一緒にあつたもの。封筒。なんと、その中には1億と書かれた小切手だった。

「生活費用はなんだかんだで大丈夫だつたし。ま、どうせ使うんだったらコイツに使おう。じゃ、お休み1000RR」

・・・

「やつぱり旅の思い出にはカメラが欲しいな。一眼レフとデジタルあればいいか」

「二つ買い物がこに入る。

「で、ライダースーツ。ん?ライダースーツで合つてるのかな・・・。まあいいか。で、どんのがあるのかな」

ザーフと見ていく。その中にとても格好いい物があつた。

「これは・・・」

値段は、5万と結構値がするものだつたが、

「白。それに、黒い翼。これだつ」

オタク全快。ここまで腐っているとは・・・。ま、自分の趣味だからいいか。

「ヘルメットは貰つたやつでいいし。じゃ、ブーツかな」

一応、ホンダの純正を見ておく。さすがは大手メーカー、色々ある。

「お、TN-M71。これ格好いいなあ。通販であるかな」

あつた。よし、これにしよう。

それに、グローブや色々を購入。

「よし、結構買った。これで明日には届くのかな」

時間を設定できるようだから、一応明日にしておいた。

「じゃ、寝るかな」

これで、バイク生活一田畠が終わった。

episode 1 ~CBR1-000RARとの出会い~ (後書き)

ちなみに、この小説は自分の夢と混じしさせながら書いております。

バイクに乗つて旅する。それが僕の夢なのです。
ま、楽しんでいただければと思います。それでは、Good Luck

k

episode 2 ～旅の始まり～（前書き）

どうも、こんばんは。

前回、CBR1000RRとの出会い。そして旅にでる準備。
今回はどうなるのでしょうか？

episode 2 ~旅の始まり~

パン派、卵派

心地良い朝。時計の針は6時を指している。

「なにが心地良いんだか・・・。」

あたりはまだ暗い。

「さて、準備しよう。それより前には朝飯かな」

パンを焼く。今日の朝飯はそれだけ。

「IJのサクサク感が堪らない」

これに、マーガリンが一番上手いと思つ。

さて、ご飯も食べたし。

「まず、届け物がくるからそれまで遊んでよう」と、PCを広げる。画面には文。

「やっぱ可愛い」

オタク全快。これはどうしたものか直せない。

ピンポン

「お、来た来た。はい、ちょっと待ってください」

PCを閉じる。

・

・

「さて、届いた 楽しみだつたからなあ・・・」
まず箱を開ける。いつぺん、全部出してみる。

「おお、これがライティングギア」
覚えた。

「で、これが靴で、これがグローブ」
よく見ると、白黒ばっかだ。パンダが好きなわけではない。
よし、と一言言った後で、

「着てみるか」

着てみた。自分で鏡の前に立つて見る。

「・・・誰だこのイケメン」
ものすごく似合っていた。（自分の）
こりゃ気に入る。長く使おう。

「よし、そろそろ時間だ。袁の場所まで行こう

「おはよう、1000RR。今日からよろしく頼むな
エンジンをかける。やはり、エンジン音はいい。
ナビも買ったんだ、ついでだし付けていい。

袁「おお、隼人」「
「よひ、『』無沙汰」

袁「またカツ『』いいの乗つてんなあ？高かつただろこれ」「いや、貰つた。つていうより譲り受けた」

袁「…？・・・世の中広いねえ」

袁が悔しそうに自分のバイクを見る。

袁「ま、コイツと走るのが楽しいから、後悔はしないんだけどな」「…袁が格好よく見えた。

「じゃ、よひしく頼む」

袁「あいよ。つて、なんだそのキャラ」「俺のてん・・・いや、好きなキャラクタだよ」
じやつかん袁に引かれた。

・・・

袁「終わつたよー」

「おう、サンキュー」

袁「親友のよしみだ、無料でいいぜ」

「え、マジか。じゃあ、そうしておひよう」

袁「にしても、ライディングギア格好いいな。あの頃のお前が嘘み

たいだ」

何故か、昔の自分は気持ち悪かったのだろうかと考えた。

「それはほめ言葉か？」

袁「おうよ」

まあ、ここは有難く思つておこう。

「ありがとな」

袁「じゃ、旅頑張つてな。ばいばい」

「おひ、また会おう」

手を振つて、袁と離れる。

「（そういうえば、ガソリンがあと少しだ・・・）」
ついでに、入れていくことにしよう。

・・・

道に隣接しているガソリンステーションに入る。

「えつと、セルフかな」

そこへ、もう一台バイクが入つてくる。横に止まつたかと思つと、

? ? ? 「あんた、誰？」

と、聞かれた。女人の声だ。

「え、あ、隼人つて言います。」

? ? ? 「やっぱ、隼人！？」

・・・? この女人、自分を知つてゐる。もしかして、

「香織か？」

香織「覚えてくれてたんだー。そ、香織だよー」

しばらく合つていなかつた。ちなみにクラスメートだったヤツだ。

どうでもいいが、自分の初恋の相手。

香織「どうしたの？ バイクなんて乗つけやつて」

「いや、旅に出ようかなと思って」

香織「え、貴方も？ 私は、親に裏切られて
「裏切られた？ どういうことだ」

香織「ま、うんざりきたから旅に出ようと思つたの。だから、自分
のお金でバイクの免許とつてバイク買った。あんたはなんでバイク
持つてるのよ」

「譲り受けた。心優しい老人にな」

香織「へえ。ねえ、どうせなら私と一緒に旅しようよ」

「いいぞ。人数が多いほうがいい」

香織「！？」

「どうした？」

香織「一人だけじゃないの？」

「いや、香織とあわせて僕とだけだけど」

香織「良かつた・・・」

何がいいんだ？ ま、香織と一緒にだ。嬉しいこと限りなし。

「一応ガソリン入れてくから、待つてくれ」

香織「うん、待つてる」

香織のバイクにはカワサキと、Ninjaとロードがついた。

「忍者・・・か」

なにか、思い当たるものがあつた。

香織「どうかした？」

上田遣いで見てくる。

「いや、そのバイク。格好いいなと思って」

香織「有難う」

「いえいえ」

とりあえず、ガソリンを入れ終わった。

「さて」

香織「行く？」

「ああ。どうせだ、香織。僕の家まで来てくれ」

香織「わかつた。ついてくね」

「おうよ」

二人同時にエンジンをかける。

少しばかり空ぶかしして、

「いくぞ相棒」

走り出した。

・ · ·

ブレー キする。

「ふう、到着」

・ · · なんか、家につくたび到着って言つてる気がする。

香織「おお、ここが隼人の家か。じゃ、失礼します～」

「また、勝手に入ろうとするんじゃない」

襟をつかむ。

香織「くえつ。少しばかり首が絞まつた」

おつと、やり過ぎたか？

「すまん。じゃ、はいるわ」

香織「親は？」

「どうか行つた」

うん。間違えでは無い。

香織「そつか」

「じゃ、準備していくから。香織、今日中に出発するけど大丈夫か？」

香織「大丈夫よ。もうガソリンスタンドで会つ前から始めてるわ」

「そつか」

親がうざつたいからねえ。自分にはよくわからない。

「（親が、まともに接してくれなかつたからな）」

香織「どうしたの？（隼人が今悲しそうな顔した・・・）」

「いや、気にしないでくれ」

香織「涙出てるけど？」

「気にしないでくれ」

香織「（心配だわ・・・）分かつた」

目から涙がボロボロと零れてくる。親は、勝手だつたからな。

「だが、こうして旅させてくれるのは有難い」

香織「どうしたの？」

おつと、心で言つたつもりが口に出てしまつた。

「いや、寝言だよ」

香織「寝言は寝て言こなさいー。」

二人とも笑つた。

・・・

1000RRのエンジンをかける。

「さて、香織。出発するぞ」

香織「ええ。どこまで？」

「ど」「だらうな」

香織「え？決めてないの？」

「旅だからな」

そう旅。目的地なんてない。

香織「それもそうね」

そして、一つのエンジン音は走り出した。

episode 2 ～旅の始まり～（後書き）

さて、出発しました、隼人選手と香織選手！

隼人、親に余り可愛がられたことがないことになつておりますが、作者はそうないです。はい。

次回は、走るのをメインに書いていこうと思ひます。ビビッビ、温かい田で見てください。お願ひ致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7853y/>

疾風の風

2011年11月23日14時45分発行